

# 知的体力と人間力の涵養を目指して

上野 誠治

日本の教育システムの中で、大学は研究及び教育における高等教育機関として位置づけられている。しかし、1991年の大学設置基準の大綱化以降、時代（産業界？）の要請とも相俟って、より一層大学改革が叫ばれるようになった。また大学進学率の上昇に伴って、大学の高等教育システム自体も、いわゆるエリート型（大学進学率が同年代の15%まで）からマス型（15%から50%まで）、そしてユニバーサル型（50%以上）へと変容してきた。結果として大学は少数の優秀なエリートだけのものではなく、広く万人のための教育機関となった。

それは学びの裾野が広がったという意味においては好ましい現象ではあるが、反面、高等教育機関で学ぶという意識の希薄な学生も入学してくるようになり、大学は高度な教育内容のほかにその対応（のための大学改革）を考えねばならなくなっている。高等学校から大学へのスムーズな移行を企図して、大学のカリキュラムの中に基礎演習の類いを設けたり、大学教育を受けるために必要な基礎学力を補うためのリメディアル教育を大学自らが実施したりしなければならなくなっている。しかし、それは大学の本来の任務とは異なるように思われる。むしろ一定レベルの大学教育に耐えられる「生徒」のみが入学して「学生」になるべきであろうし、仮にスムーズに大学教育になじめなかった場合でも、その挫折を通じてさらに成長していくことができるような学生でなければならないのではないか。

大学に余裕があればそのような教育があっても構わないが、持ちゴマの関係で、現有の教員たちが専門科目を減らしてそのような科目を担当しているのが現状である。その結果、高等教育の中身はますます薄っぺらなものとなり、講義内容は概論・概説に終始し、問題をより深く研究するという域には達しない。結果として、大学院への進学率も減少する一方である（私が所属するある学会では、大学院生の発表が減り、それを補うように、現任教員・研究者の「招聘発表」が近年増加しているようである。大学院進学率の減少は、少子化や教育予算の削減などによって大学における教員ポストが減少していることも原因の1つかもしれない）。

ユニバーサル型の教育システムに移行しつつある今、教育対象は以前のような少数の優秀なエリートではない。要するに、一部の研究大学を除いた他の多くの大学では、企業や社会から求められる人材の「生産」こそが最重要課題であって、学術的な研究を深めるということは求められていないのである。大学の専門学校化が指摘される所以である。

しかし、だからといって入ってくる学生に合わせた教育ばかりでは、学生は成長しないだろうし、大学の存在意義も希薄になろう。手取り足取り教育するだけではなく、大学の教育レベルに学生も合わせるように努力すべきである。場合によっては、そのレベルに達する見込みがなければ、成績を基に退学勧告ができるような仕組みを採用することも必要であろう。そのためには、学生はもちろん、その保護者や学費支給者の理解も必要になるだろうし、社会もそのような学生の受け皿を用意しておかなければならない。大学にとっては、その分授業料収入が減ることになるので、事はそう簡単ではないのかもしれない。

現在、われわれを取り巻く複雑化した諸問題に対処していくために、学生たちは高等教育を受けるにふさわしい知的体力を身につけることこそが肝要であろう。そのためには、大学は単に卒業後すぐに企業や社会で役に立つような知識を授けることのみを目的とするのではなく、知的な活動を通じた広い意味での知的体力や人間力を涵養していける場でなければならないのではないか。